

博士論文要約

『ニーベルンゲンの歌』における「英雄」ハゲネの造形

東北大学大学院文学研究科文化科学専攻

野内 清香

論文目次

序論

第1章 『ニーベルンゲンの歌』とニーベルンゲン伝承

- 1-1. 『ニーベルンゲンの歌』の概要
- 1-2. ハゲネの二つの顔 (1) 暗殺者
- 1-3. ハゲネの二つの顔 (2) 英雄
- 1-4. 二つの伝説 ——ブリュンヒルト伝説とブルグンド伝説

第2章 ハゲネの源流

- 2-1. 『エッダ』におけるヘグニ
- 2-2. 『ヴォルスンガサガ』におけるヘグニ
- 2-3. 『シズレクスサガ』におけるヘグニ
- 2-4. 『ワルターリウス』におけるハガノ
- 2-5. 英雄から暗殺者へ

第3章 『ニーベルンゲンの歌』におけるハゲネ

- 3-1. ハゲネの属性設定
 - 3-1-1. ハゲネの外見と異教性
 - 3-1-2. ハゲネの来歴
- 3-2. 人物関係の中のハゲネ
 - 3-2-1. ハゲネの身分
 - 3-2-2. イースラントの旅における二対二の構成
 - 3-2-3. フン族の国への旅における三対三の構成
 - 3-2-4. 潔白な若者 ——ギーゼルヘルとダンクワルト
 - 3-2-5. 猛き代理人 (1) ゲールノート
 - 3-2-6. 猛き代理人 (2) フォルケール
 - 3-2-7. 二羽の鷲 ——グンテルとハゲネ
 - 3-2-8. 人物配置から見たハゲネ

結論

論文要約

本論文は、ニーベルンゲン伝承を素材とし、13 世紀の匿名の詩人により創作された中高ドイツ語の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』について、その主要人物ハゲネの造形に焦点を当てて論じるものである。

ニーベルンゲン伝承は、5、6 世紀の歴史的事件に端を発し、時代や地域ごとに様々に語り継がれてきたものである。『ニーベルンゲンの歌』の詩人もまた、その伝承を素材としつつ、独自の解釈により物語の緊密な構成を整え、また舞台を騎士社会に置き換え、宮廷的な描写を加えることによって、古い物語を騎士叙事詩として新しく作り上げたのである。

詩人の創作意図を探る上で見逃せないのがトロネゲのハゲネという登場人物である。ハゲネはブルゴント王家の親戚であり、トロネゲ出身の勇敢な戦士たちを率いて、厚い忠誠心をもってブルゴント王家に仕えている。また王家の人々やその家来たちからも、その武人としての力量だけでなく幅広い知識や知恵を頼みにされ、重用されている。しかしその目つきは氷のように鋭く、見る者に恐怖を抱かせるような容貌であるといった外見の描写により、明らかに他の人物たちとは差別化されている。また、宮廷的な叙事詩の舞台にあって、ひとり荒々しく古い異教時代の英雄性を前面に出される人物でもある。このように大変特殊なキャラクターとして設定されているハゲネが、英雄ジーフリトを殺し、それによりクリエムヒルトの復讐の対象となる。物語の冒頭でクリエムヒルトが見る「鷹の夢」で、早くもこのことは予言的に語られており、ジーフリトとクリエムヒルト対ハゲネの対立がこの物語の中心を貫くことになる。

ニーベルンゲン詩人は、物語全体の構成と同様に、ハゲネについても、同時代のドイツの伝承そのままに語るのではなく、古い伝承の要素も取り入れながら、この壮大な叙事詩の最重要人物を作り出した。詩人によるハゲネの人物造形と作中での扱いは、この叙事詩全体の構想と密接に関わっているのである。それゆえ、この論文では、物語中でハゲネがどう描かれているかを分析するだけでなく、様々なニーベルンゲン伝承に含まれる相異なるハゲネ像が、『ニーベルンゲンの歌』にどのように取り込まれ変形されているかを詳しく検討した。

第1章 ニーベルンゲン伝承の発生と継承

本章では、『ニーベルンゲンの歌』の内容とハゲネの人物像について、また叙事詩の素材であるニーベルンゲン伝承の発生と叙事詩成立当時までの継承についての概要を論じた。

1-1 節では、『ニーベルンゲンの歌』を前半と後半に分け、物語の荒筋を述べた。前半は、ブルゴント王家の支配するウォルムスの宮廷を英雄ジーフリトが訪れ、グンテル王の妹クリエムヒルトに求婚するところから始まる。序盤で、イースラント女王ブリュン

ヒルトをグンテル王の妃とするための冒険が描かれた後、叙事詩は主筋に入ってゆく。ジーフリトによって名誉を汚されたとするブリュンヒルトの訴えを受けて、王妃に忠誠を誓うハゲネは、グンテル王の了解を得つつ、ジーフリトを謀殺する。後半は、夫を殺されたクリエムヒルトの復讐の意志によって、ブルゴント族が滅亡するに至るまでの物語である。クリエムヒルトの再婚相手であるエッツェルの支配するフン族の国が、凄惨な死闘の舞台となる。

1-2 と 1-3 では、物語の前半・後半それぞれにおけるハゲネの主要な行動や発言、また周囲からの評価に関する描写を検証した。

前半でのハゲネは、ジーフリト暗殺とニーベルンゲン財宝奪取という二つの陰謀において主導的な役割を演じており、陰険で不実な男として描かれている。危険な人物としての彼の評判は国外にも知られ、ジーフリトの父であるニーデルラント王シグムントの口からもそのように語られている。

他方、後半でのハゲネは、ジーフリト殺害と財宝の奪取が原因で、クリエムヒルトの復讐の標的となるものの、前半での悪役の印象は薄れ、ブルゴントの破滅という悲劇的な物語展開の中で、模範的なゲルマン武士の堅固な反抗精神を示した英雄として描かれている。彼はまた、他国の王や英雄たちから好意的に受け入れられ、ブルゴント族の中からは、フン族の国への旅の途中から常にハゲネと行動を共にすることになる楽人フォルケールが、ハゲネの理解者・賛同者となる。

以上のように、『ニーベルンゲンの歌』におけるハゲネという人物は、かなり明確な二つの属性、つまり暗殺者と英雄という二つの顔を付与されている。1-4 では、アンドレアス・ホイスラーの発展段階説をもとに、この叙事詩におけるハゲネの二面性が、叙事詩の素材であるニーベルンゲン伝説の成り立ちに由来することを説明した。ホイスラーは 1921 年の著書『ニーベルンゲン伝説とニーベルンゲンの歌』で、物語前半のジーフリトの死をめぐる伝説をブリュンヒルト伝説、物語後半のブルゴント族滅亡についての伝説をブルグンド伝説とし、それぞれが 5 世紀から 13 世紀までの 800 年の間に、いくつかの歌謡や叙事詩の段階を経て『ニーベルンゲンの歌』の成立に至ったとした。

ニーベルンゲン伝説の変容は北欧で記録された文献をもとに探ることができる。伝承は時代によって大きく二つに分けられる。第一次伝承のより古い伝説相は、歌謡『エッダ』及び、それを散文化した『ヴォルスンガサガ』の中に認められる。第二次伝承はドイツで発展したより新しい伝説相を伝えるもので、『シズレクスサガ』の中に求められる。伝承の主要エピソードが各段階でどう語られているか、その要点をまとめると次頁の表のようになる。

このことから分かるのは、ニーベルンゲン詩人は、当時よく知られていた第二次伝承から概ね素材を取り入れつつ、第一次伝承をも意識していることである。詩人は最終場面において、第一次伝承ではアトリとグンナルの間で行なわれた劇的な駆け引きを、復讐者クリエムヒルトとその標的ハゲネに置き換えて再現し、物語の冒頭で、この二人が

敵対することを「鷹の夢」によって暗示する。つまり、詩人はクリエムヒルトとハゲネの対決を物語の中心を貫く柱と考え、ハゲネの像を作り上げていったのである。

ハゲネは常に「対立者」(Gegner)として印象付けられる。この叙事詩においてハゲネは、前半では非業の死を遂げる英雄ジーフリトに対置され、後半では復讐の名の下に悪鬼の所業ともいうべき大虐殺を引き起こしたクリエムヒルトの敵となる。前半と後半でハゲネの印象が異なるのは、そのように「誰と対立しているのか」によるところが大きい。

伝承の各段階の要点

	第一次伝承	第二次伝承	『ニーベルンゲンの歌』
ジーフリト (シグルズ、ジグルト) 暗殺	寝室でグットルムが殺害 (グットルムも返り討に合い死亡)	森の中でヘグニが殺害	森の中でハゲネが殺害
クリエムヒルト (グズルーン、グリームヒルト) の復讐の対象	兄弟を殺したアトリ	夫を殺したヘグニ、グンナル、そして他の兄弟	夫を殺したハゲネ
フン族との戦闘	グンナルとヘグニが生き残る	グンナルは先に捕えられて殺され、ヘグニが生き残る	グンテルとハゲネが生き残る
ニーベルンゲン財宝の在処	グンナルがホグニの死を条件に話すと言うが、ホグニが殺されても結局明かさない	ヘグニは死ぬ前に女を孕ませ、息子に財宝の隠し場所の鍵を残すという形で明かす	ハゲネはグンテルが生きている限り話さないと断るが、グンテルが殺されても結局明かさない

第2章 ハゲネの源流

本章では、『ニーベルンゲンの歌』成立以前の古い伝承をとりあげ、特にハゲネに相当する人物がどのように描かれているかを、より詳しく検討した。

2-1 では、まず古代北欧歌謡集『エッダ』を取り上げた。『エッダ』中にニーベルンゲン伝説を扱った歌謡は 19 あるが、これらの歌謡ではヘグニ (ハゲネ) はグンナル (グンテル) 王の兄弟で豪胆な英雄であり、その描写からは、少なくとも北欧に伝承が伝わった当時、ハゲネに相当する人物は『ニーベルンゲンの歌』後半に見られる英雄的人物に近いものであったと推測できる。

2-2 では、『ヴォルスンガサガ』のヘグニについて論じた。『ヴォルスンガサガ』は、『エッダ』で断片的に語られてきた伝承の内容をまとめた散文で、1260 年頃成立したと言われているが、北欧でのヘグニは時代を経てもなお、『エッダ』の同様の英雄像を

保ち続けている。

2-3 では、『シズレクスサガ』のヘグニについて扱った。比較的新しいドイツでの伝承をまとめたこの散文では、ヘグニはシグルズ暗殺者となり、それゆえにグリーンヒルドの復讐の対象となる。同時にここでは、ヘグニは王妃と妖精の間に生まれた子供であるという新たな設定が現れる。彼はその出自のために恐ろしい容貌をしており、またヴァルタリとの戦いで片目を失ったという特徴的な外見描写も追加される。

2-4 では、古い伝承から新しい伝承への変化（あるいは追加と混合）の過程について、重要な手がかりを与えてくれる材料として、ラテン語の叙事詩『ワルターリウス』を検討した。ここからはまず、9～10 世紀の時点で、ハゲネが王族ではなく家臣の身であるという伝承が存在していたことが読み取れる。ハゲネがフン族の国で人質として暮らしていたという過去も、ここからニーベルンゲン伝説にもたらされたことがわかる。しかし『ワルターリウス』のハガノは、恐ろしい外見の気性の荒い男ではなく、キリスト教的な美德を備えた騎士として描かれている。この時代のハゲネ像も決して卑怯な暗殺者ではなく、英雄的な人物としてとらえられていたことが窺える。

2-5 では、英雄から暗殺者へというハゲネの人物像の変化に、前述の『ワルターリウス』からもたらされた「片目の伝承」が影響しているという仮説を提示した。『シズレクスサガ』でもヘグニはヴァルタリとの戦いで負傷して片目を失うが、そこでは、この隻眼という属性が、妖精の息子という出自に由来する恐ろしげな容貌と結びつき、ヘグニの本質を象徴するきわめて重要な特徴となる。「トロルのような」容貌や、それを理由づける「父親が妖精である」という説明は、むしろ「片目」のイメージから後付けされたものではないだろうか。加えてこの「片目」のハゲネのイメージには、ゲルマン神話の隻眼の神オージンが重ねられていると推測される。知識の神であると同時に戦いの神でもあるオージンには、目的を達するために悪知恵や二枚舌を用いる不実な面もある。こうしたイメージは、言葉巧みにグンナル＝グンテルを煽り、用意周到に陰謀を張り巡らせてジーフリト暗殺を実行するヘグニ＝ハゲネの像に重なるものがある。

第3章 『ニーベルンゲンの歌』におけるハゲネ

本論文の中心となる第3章では、第2章で見てきた伝承のヴァリエーションを取捨選択しつつ、ニーベルンゲン詩人がハゲネをどのような人物に作り上げたのかを、ハゲネ個体の属性設定（3-1）とハゲネを取り巻く人物関係の設定（3-2）という二つの方向から詳しく論じた。

まず 3-1-1 で、ハゲネの異教的英雄としての側面について検討した。たびたび強調されるハゲネの鋭い眼差し、見る者に恐怖を呼び起こす容貌の描写は、第2章で述べた「片目」のイメージによるものであり、不吉な異教の神の影響を背後に感じさせるものである。ハゲネはこれによって、キリスト教化された『ニーベルンゲンの歌』の世界において、異教的・超自然的な世界と交渉できる特別な人物として位置づけられる。フン

族の国への旅の途中、ハゲネのみが水の乙女たちと遭遇して、ブルゴント族滅亡の予言を受けた出来事は、最も顕著にその属性を表している。

また、『エッダ』や『ヴォルスンガサガ』で語られるような神話的な財宝の来歴は、『ニーベルンゲン之歌』の中では言及されないのだが、しかしジーフリトが所有していた宝の中には、タルンカッペ（隠れ蓑）のような不思議な魔法の品々が含まれている。そして宝の番人である侏儒のアルプリーヒの「彼が我らから隠れ蓑を奪ったことがジーフリトの身には災いとなった」という言葉から、この宝もやはり、北欧の伝承にあるように、所有者に災いをもたらす呪われた財宝であることがわかる。クリエムヒルトがその宝を施し与えることによって、他国の勇士たちを彼女の味方として集めようとしていることに、ハゲネは危機感を抱き、宝を取り上げてライン河に沈める。こうした設定からも、現世と古い異教の世界との接点となるハゲネのみが、宝のもたらす災いを察知し、人々に警告を与えることができるのだという含意が読み取れる。

3-1-2 では、ブルゴントの家臣としてのハゲネがどのように描かれているかを詳述した。『ワルターリウス』から取り込まれた、ハゲネが過去に人質としてフン族の国で暮らしたという設定は、一方ではフン族の王エッツェルや、そこに身を寄せる英雄たちとの交友関係を理由づけ、また、フン族の招待を危険視しながらも、最もよくフン族を知る者として、旅の道案内を引き受けざるをえないという、皮肉な展開の説明となる。さらに、「人質」経験のために、長く離れていた故国への強い執着が生まれたという理由付けも可能になる。プリュンヒルトの名誉のためにクリエムヒルトの信頼を裏切り、用意周到にジーフリト暗殺を実行する、そうした非情なハゲネの行動は、この異常なまでのブルゴントへの忠誠心によって説明できる。

人物関係の中のハゲネについて論じた 3-2 では、まず 3-2-1 において、この叙事詩におけるハゲネの身分がどのように設定されているのかを確認した。叙事詩の成立当時、ハゲネの出自については、様々なヴァリエーションが存在していたが、詩人は自らの創作意図をもって、ブルゴント王家の親戚筋にあたる重臣と位置付けた。これによりハゲネは、王の兄弟として王に付属するのではなく、王から独立し自らの身内の者や家来、仲間たちによって付属されるものとなる。

3-2-2 では、こうして新たにハゲネの周辺に設定された人物配置の様相について、イスラントへの旅を例として考察した。石川栄作の「悲劇の二重構造」論で明確に図示されたように、この叙事詩の作者である詩人は、作品の構成を非常に注意深く練り上げている。つまり、物語全体の形を整える「悲劇の二重構造」（＝大きな二重構造）の中に、個々の人物や集団の対立または並置・対比といった小さな二重構造が配置されている。

ハゲネとその周辺人物たちはしばしばその小さな二重構造の構成員となる。グンテルがプリュンヒルトに求婚するためのイスラントへの旅では、グンテル、ジーフリト、ハゲネ、ダンクワルトで以下のような 2 対 2 の関係が構成されている。王者であるグン

テルとジーフリトは白い衣装、ブルゴントの臣下であるハゲネとダンクワルトは黒い衣装を身に着けることにより、2対2の階級的な違いが視覚的にも明示される。さらにこの中には「二羽の鷲」であるグンテルとハゲネに対し、ジーフリト側にはダンクワルトが配置されている。この時点でダンクワルトが旅に加わるのは、シンメトリカルな構図をなすための数合わせであるが、同時に、やがて謀殺される悲劇の英雄ジーフリトとハゲネの弟ダンクワルトの並置は、後編におけるダンクワルトの役割を暗示しているとも考えられる。

求婚の旅の集団における2対2の人物配置

	二羽の鷲（二人）	罪なき者（二人）
白：王者（二人）	グンテル	ジーフリト
黒：臣下（二人）	ハゲネ	ダンクワルト

3-3-3 では、フン族の国への旅立ち以降鮮明化してくるブルゴント王家とトロネゲ軍の対応関係について、まずその大枠となる構図を提示した（以下の表を参照）。旅立ち以後のいくつかの場面で、ブルゴント勢の主要な人物として特に名前を挙げられるのは、グンテル、ギーゼルヘル、ゲールノート、ハゲネ、ダンクワルト、フォルケールの6人であり、これはグンテルを長とする集団（王家）とハゲネを長とする集団（トロネゲ軍）からそれぞれ三人が選出された、3対3の構図になっている。この中でさらに、リーダーであるグンテルとハゲネ、ギーゼルヘルとダンクワルト、ゲールノートとフォルケールがそれぞれ対応関係にあると見ることができる。

フン族の国への旅の集団における3対3の人物配置

	二羽の鷲	(ジーフリト殺しと無関係)	
	リーダー	(潔白な若者)	(猛き代理人)
王家	グンテル	ギーゼルヘル	ゲールノート
トロネゲ軍	ハゲネ	ダンクワルト	フォルケール

3-2-4では、ギーゼルヘルとダンクワルトの対応関係について考察した。この二人はジーフリト殺害に関して完全に無罪であり、それぞれの属する集団の年少者として設定された「潔白な若者」である。ことに注目すべきは、ダンクワルトはこの叙事詩で詩人が新たに創作し、王家のギーゼルヘルに対応するようハゲネの側に配された人物だということである。ギーゼルヘルは、物語の中で、ほとんど時間の経過を無視して、常に若者として描かれる。同じようにダンクワルトも、若い従卒たちの代表者として描かれている。ダンクワルトは、ブレードリーンの襲撃を受けた際に、「ジーフリト様がお亡くなりになった時、私はほんの小さな子どもでした」と弁明しているのだが、この「小さな子ども (kindel)」という語は、本来ギーゼルヘルに対して使われた単語であり、さらに『シズレクスサガ』のギースレルが、シグルズ殺害時にはまだ5歳

だったので自分には責任がないといった主張を行っている点とも符合する。こうしたことから、明らかに詩人は、ギーゼルヘルとダンクワルトを関連付け、同じ役割を担わせていると見ることができる。この罪なき若者ダンクワルトをフン王の弟が襲撃したことを引き金に、ブルゴント族とフン族の戦闘が始まったことにより、聴衆の心理はブルゴントが善、フン族が悪という図式に誘導される。

3-2-5と3-2-6では、ゲールノートとフォルケールの対応関係について論じた。ゲールノートとフォルケールは、「リーダー」や「潔白な若者」にはふさわしくない暴力的な面を引き受けて、物語の駆動力として機能する「猛き代理人」である。3-2-5では、主としてグンテルの、また時にはギーゼルヘルの代理人であるゲールノートについて考察した。北欧の第一次伝承に現われる若く無鉄砲なグットルムは、シグルズ殺害の際にシグルズの反撃を受けて死亡したため、後半のブルゴント滅亡の物語には登場しない。しかしその後ドイツで発展した新しい伝説で、ゲルノスは、むしろ後半の展開の中で三人の王の一角として活躍するようになる。これを受けて『ニーベルンゲンの歌』の詩人は、北欧のグットルムのイメージを土台としつつ、ブルゴントの三人の王の中で汚れ役を担う人物としてゲールノートを造形し、物語後半における物語駆動的な役割を演じさせたのである。

3-2-6では、ハゲネの代理人であると同時に詩人の代理人でもあるフォルケールについて考察した。ホイスラーの説によれば、フォルケールもまた比較的新しく、いわゆる『古き災厄』で、1160年頃の詩人が、ブルゴントの悲劇を歌い上げるために追加した人物であると見られている。『ニーベルンゲンの歌』の詩人もまたそのキャラクターを利用して、作中でフォルケールに自らの叙事詩の方針を表明させている。フォルケールはハゲネの味方であることを宣言し、他の者から非難されるようなハゲネの行動を賞賛する。そこには、ハゲネをこの叙事詩の中で「英雄」として歌い上げようとする詩人自身の意思がこめられている。またフォルケールは、見る者に恐怖を引き起こす鋭いまなざしにおいてハゲネに似ており、フン族の国への道案内においてハゲネを代行するなど、外見や知性の面で、キャラクターそのものとしてハゲネとの類似性を示している。そしてこの分身が、叙事詩前半の「獰猛なハゲネ」の像を引き取ることにより、後半のハゲネは、むしろ異教的英雄として純化されることになるのである。

3-2-7では、グンテルとハゲネの対応関係について論じた。彼らは王家とトロネゲ軍それぞれのリーダーであり、叙事詩冒頭の「鷹の夢」で、クリエムヒルトの「鷹」すなわちジーフリトを殺す「二羽の鷲」であることが暗示されている。実際にジーフリト殺害にあたり、計画から実行に至るまで主導したのはハゲネであり、後にクリエムヒルトの憎悪の対象はハゲネ一人に集中するのであるが、詩人は最後まで「復讐は彼ら二人に対して充分に行われた」として、グンテルとハゲネを「対」で扱っている。その理由の一つは、詩人が北欧の第一次伝承で語られる「財宝をめぐる駆け引き」の構図を叙事詩の最終場面で利用したかったからである。『エッダ』の「グリーンランド

のアトリの歌」と『ヴォルスンガサガ』では、フン族（の王）からグンナル王に対し、彼が所有するニヴルングの宝を身代金として支払う気はないかとの提案があり、グンナルがまず弟ヘグニの心臓を要求する。その通りにヘグニが殺されると、グンナルはアトリに対し、宝の在処は決して明かさないと宣言する。詩人はこれを、ジーフリトの未亡人クリエムヒルトとジーフリト殺害者ハゲネとの間での、ジーフリトの形見をめぐる対決として甦らせたのである。

詩人がグンテルとハゲネを「対」で扱うもう一つの理由は、両者それぞれに「ブルゴント族の滅亡」と「ニーベルンゲン族の滅亡」を象徴させるためである。北欧でもドイツでも、時代の経過とともにグンナルの重要性はヘグニよりも低くなる傾向があり、『シズレクスサガ』ではグンナルは弟たちよりも先に死んでしまう。しかし詩人は、王であるグンテルの死を、ブルゴント族の滅亡という大きな悲劇の象徴と考え、『エッダ』や『ヴォルスンガサガ』のように終幕直前に持ってきたのである。それに対しハゲネは、ニーベルンゲン財宝を所有する者の破滅の運命を象徴し、呪われた宝を叙事詩の舞台から消し去る役目を負う。

3-2-8では、以上論じてきた人物配置の意味について総括的な考察を加えた。ハゲネをトロゲネ軍の長とし、格の上でグンテルと同等の英雄と位置づけてもなお、ジーフリト殺しの罪が消えることはない。ハゲネ自身もそれを隠そうとせず、クリエムヒルトの憎しみに正面から対峙し、彼女の復讐を受けて立つ。そのためハゲネは、ジーフリト殺しの罪人であることと、ブルゴント族を襲う滅亡の運命に立ち向かう英雄であることを同時に成立させなければならない。

そこでハゲネの罪を相対的に軽減して見せるために、詩人によって創作されたハゲネの弟ダンクワルトが、ブルゴント側に戦いの大義を引き寄せ、詩人の代弁者である楽人フォルケールがハゲネを支持することによって、ハゲネはブルゴント滅亡という悲劇の中心に英雄として立つことを許される。詩人は、国王グンテルではなく、その臣下でありかつトロネゲ軍の長であるハゲネの方を、最後にクリエムヒルトと対決する存在として選び出した。最終場面の劇的な対決は、ジーフリト殺しの罪人であると同時に、運命に立ち向かう英雄としてのハゲネによってのみ可能なのである。

結論

これまでの考察から、『ニーベルンゲンの歌』におけるハゲネの造形の背後にある詩人の創作意図は、以下のようなものだったと考えられる。

詩人は、叙事詩全体の成り立ちに関して、強い構成的な意図を持っていた。『エッダ』『ヴォルスンガサガ』で扱われる物語が、シグルズの先祖から遺児スヴァンヒルドの死に至るまでの長い年月を順に追っていくのに対し、『ニーベルンゲンの歌』においては、前半と後半で構成される「大きな二重構造」のもとで、内部の小構造が分節化されてゆ

く。そしてその構成的な試みが、叙事詩の軸となる人物ハゲネをどう造形するかという課題の解決として具体化してゆくのである。

騎士道物語の模範的カップルであるジーフリトとクリエムヒルトに、手を加える余地は少ない。物語に緊張と美しさ（卓越性）を生み出すには、彼らの「対立者」であるハゲネこそを、強烈な敵役として際立たせる必要がある。しかも、物語の後半では、復讐鬼と化したクリエムヒルトの憎悪に毅然と向き合う強さと品格をハゲネは持たなければならない。そのために詩人は、ハゲネ個人の属性として、古い伝承に見られる英雄性と同時に、より新しい伝承の中に現われる異教性（片目の伝承）をも取り入れた。加えて詩人は、外形的にハゲネの位置を特権化することを試みる。それが、人物配置におけるシンメトリカルな二重構造の反復であり、これはまた、大きな二重構造を内側から補強する小構造として、物語全体の結構の美しさを生み出す源ともなった。

こうして伝承のヴァリエーションを取捨選択しつつ独自の構想に基づいて造形した英雄ハゲネと、ジーフリト・クリエムヒルト夫妻の対立が、この叙事詩を貫く柱となる。ブリュンヒルド伝説に基づく前半と、ブルグンド伝説に基づく後半は、前半のジーフリトの死が後半のクリエムヒルトの復讐を結果するという厳密な因果関係のもとで連結され、その中に、ハゲネを特権化するための人物配置の構図が埋め込まれる。つまりそこでは、ハゲネが、王であるグンテルに匹敵する、あるいはそれを凌駕する英雄的な存在として位置づけられるのである。そしてこのグンテル・ハゲネの「対」は、冒頭「鷹の夢」における「二羽の鷺」としてそこから始まる破滅の運命を予告し、かつ終局の「財宝をめぐる駆け引き」の当事者としてこの破滅の物語を完成させるという仕方で、物語の始点と終点を刻印する構造上の留め金ともなっている。

本論文において、ハゲネが「英雄」として造形されているというとき、それは単にこのキャラクターに特別な属性が付与されたというだけではなく、叙事詩全体を貫く構成的な意図が背景にあり、それを具体化する課題の解決として、ハゲネをひとつの中心とする大小の対立・対比構造が分節化されたということである。第3章で論じた3+3の構造は、その最も重要な要素として指摘できるものである。